

# セントルイス万国博覧会における日本の展示品と評価

楠元 町子

## 1. はじめに

万国博覧会は、「世界的な技術見本市、技術の成果の場」<sup>1)</sup>であり、庶民にとってはさまざまな物を実際に体験する機会として重要な役割を果たしてきた。本論文は、セントルイス万国博覧会の日本の展示品を分析することにより、日本の産業の進展状況や国際競争力を明らかにし、万国博覧会が日本の貿易に与えた影響の考察を試みるものである。

20世紀最初の万国博覧会であったセントルイス万博は、世界の技術の中心がヨーロッパから米国に移動しつつあることを象徴するような博覧会となった。機械館の展示の大半を占めたのは、米国の巨大な機械であった。日本は、セントルイス万博に日露戦争中にもかかわらず政府や地方府県の役人を多数派遣し、また民間人も多く出かけ、日本製品の広告宣伝や外国の産業文化の情報集積をした。

セントルイス万博については、建築や教育の視点、オリンピックとの関係から近年多数の研究がなされている。<sup>2)</sup>またセントルイス万博の日本の展示品に関する主なる論文としては、日本の美術品を分析した志邨の論文<sup>3)</sup>や「アイヌ人」の展示に着目した宮武の論文<sup>4)</sup>、運輸館に展示された日本地理模型を詳細に研究した長野の論文<sup>5)</sup>があるが、セントルイス万博の日本の展示品全体に考察が加えられていない。本論文はこれら先行研究の貴重な成果を踏まえて、第五回内国勸業博覧会の資料やセントルイス公立図書館所蔵の資料を分析することにより、セントルイス万博における日本の展示品の実態、米国での評価、日本の貿易への影響を明らかにしたい。

## 2. セントルイス万博と日本の参加

### 1) セントルイス万博の概略と日本の参加経緯

セントルイス万博は、1904年(明治37)4月30日から12月1日までアメリカ合衆国がルイジアナ地方をフランスから購買して100年経過したことを記念して、ミズリー州セントルイスで開催された。会場の敷地面積1240エーカーは、1893(明治26)年シカゴ万博(633エーカー)の2倍、1900(明治33)年パリ万博(336エーカー)の4倍で、あまりに広大な会場面積は「人間の気力と体力の限界を超えた」<sup>6)</sup>と評され、参加国は44カ国、入場者数約2000万人であった。収入は約1029万ドル、支出は2452万ドルとなり、経営的には大失敗の万博となったが、自動車、航空技術、無線電信の三つの近代科学をはでにデモンストレーションし、自動交換式電話やテレプリンターの登場など来るべき米国の高度機械化時代を予告する博覧会となった。<sup>7)</sup>

日本に対しては、1901年(明治34)8月22日にアメリカ合衆国国務卿ジョン・ヘーから米

国駐在高平公使に「世界各国が博覧会に参同し各代表者を指命し其富源産業及文化の発展を示すに最も適当にして且充分なる出品を展示せられんことは合衆国国民を代表して希望する」という参加要請があった。セントルイス万博は当初 1903 年に開催が予定されており、日本は同年大阪で第五回内国勸業博覧会の開催予定があったため、外国の博覧会に参加することは困難であると判断した。1901 年 10 月の閣議で政府として正式に参加しない代わりに、民間の商工業者を勧誘して出品協会を組織させ、補助金を支給し出品することを決定し米国へ通知した。

1902 年 1 月博覧会会社総裁フランシス (David R. Francis) は、日本の外務大臣に再考を促す書状を出すと共に、2 月には博覧会会社重役スミス (J. E. Smith) を勧誘委員として日本へ派遣した。3 月 31 日に日本に到着したスミスは、日本政府の方針を聞き、東京、横浜、静岡、名古屋、京都、大阪、神戸等を巡歴して商業会議所又は有志者の団体を訪れ、博覧会の説明と出品の勧誘をした。当時日本の貿易相手国として米国が極めて重要な位置を占めていたこともあり、日本の民間業者のセントルイス万博への関心は高かった。早くも 1902 年 3 月には横浜の絹貿易商の菅川清が、外国人として初めて博覧会協会へ万博参加を希望する手紙を送り、「私たちは大阪で同じ年に博覧会を開くが、それは内国のことであり、あなた方は、世界の博覧会である。」と述べ、セントルイス万博のために作成したバッジを同封して参加の意気込みを示していた。<sup>8)</sup>

スミスは日本の至る所で歓待を受け、清国行きを中止して予定よりも長く日本に滞在し、帰国後日本の印象を次のように報告した。「日本の労働者は、技術的には優れていないが、多くの工業品の中でもすばらしいものは、精巧な七寶細工である。日本の都市の商工業者団体は博覧会協会を組織している。」さらに同年 5 月には、博覧会会社の東洋委員バレット (John Barrett) が日本を訪れ、各地の日本の主な商工業者と面会し、米国には「長崎や横浜では博覧会に大変興味をもっている」と知らせた。また日本政府には、日本がセントルイス万博に参加すれば博覧会会社より日本に対し各種便宜を与えることや、政府館敷地や陳列地区等に最良の場所を提供する用意があることを伝えた。<sup>9)</sup>

日本政府は、これら米国のたび重なる勧誘や、セントルイス万博の開催が外国からの参加が少なかったため 1904 年に延期されたこと、手島精一の熱心な勧めもあり<sup>10)</sup>、1902 年 10 月閣議で博覧会に政府として参同することに決定し、米国博覧会参同準備委員会を設置した。当時博覧会は農商務省の管轄であったため、委員長に農商務総務長官安廣伴一郎、委員には農商務省各局長、書記、技師らを任命した。出品物が観覧者の注意を引くかどうかは、陳列地区の広さや位置が大きく影響するため、陳列面積と好立地な場所を得るため直ちに準備委員をセントルイスへ派遣した。翌年 2 月には陳列館内の所要面積について博覧会会社と協定したが、交渉の過程でフランスの希望により工業館の陳列面積を割譲し、通運館ではペンシルバニア鉄道会社の展示のために陳列地域を変更したりした。一方ロシアの博覧会不参加により、最終的には農業館、林業・漁業及び狩猟館では陳列面積拡大に成功し、また新たに電気館での陳列場所を得たりして、日本の陳列面積全体では当初割り当てよりも増加した。<sup>11)</sup>

第 18 回帝国議会で明治 36 年度より明治 38 年度に渉る 3 ヶ年の継続費として金 80 万円の支出を決定し、1903 年 6 月米国に農商務大臣より外務大臣を経て米国に参同を通知し、同年 7 月に臨時博覧会事務局を設立した。総裁は最初農商務大臣平田東助、後に農商務大臣清浦圭吾、

副総裁は男爵松平正直、事務官長は東京高等工業学校校長の手島精一が任命された。1903年9月28日には、調査交渉や準備のため手島精一らが渡米し、同年11月3日には合衆国の博覧会日本政府館の敷地で敷地交付式が遂行された。総裁フランシスが式辞を述べ、「ヨーロッパの大国のほとんどが、参加の意志を示さなかった時、日本は私たちの勧誘を受け入れてくれた。日本の好意的返事は、私たちに自信を与えた」<sup>12)</sup>と日本の迅速な参加表明に感謝の意を表明した。

1904(明治37)年4月11日には、日露戦争中にもかかわらず日本からの出品は他の参同国より早く陳列され、開会に先立ち工芸館内の日本陳列場前で出品陳列落成式が挙行され、開会の当日より観覧させた。このことは誠実で勤勉であるという日本人のイメージを米国人に印象付ける要因となった。

## 2) 日本政府の出品方針

セントルイス万博における日本政府の出品に関する方針は以下のものであった。「我カ国ノ文化、産業ノ発達及富源ヲ展示シテ以テ輸出貿易ノ拡張ニ資セント欲シ深く出品物ノ選択ニ注意シ美術品ハ厳密ナル監査ヲ経テ其華ヲ抜キ商品ハ現ニ貿易品タルモノ又ハ貿易品タルニ適スルモノニ限り嚴重ナル査定ヲ経テ其出品ヲ許可シ、教育、農業、林業、水産、狩猟、採掘、冶金ニ関スル出品物ハ何レモ当該ノ官庁ニ交渉シテ品目ヲ特定シ其出品人ハ最も有力ナル製産家ヲ指定スルコトトシ特ニ輸出貿易品中最高ヲ占ムル生糸ニ付イテモ亦最も善良ナル出品人ヲ特選セリ又醬油ノ如キハ自ラ広告及ビ陳列裝飾等ヲ為シ得ル者ニ限りテ出品セシメタリ」<sup>13)</sup>

美術品に関しては、1900(明治33)年のパリ万博までは、主に絵画、彫刻、建築模型といったいわゆる純粋美術が万博の「美術部」に分類されていた。本来このような西洋の純粋美術の概念が存在しない日本の美術品は、「美術部」に展示されず「工芸部」に展示されていたが、セントルイス万博の「美術部」では、これまでの純粋美術の枠が取り除かれ、工芸品の出品が許されていた。<sup>14)</sup>

美術品の出願の告示から監査の日まで僅か4ヶ月しかなく、製作する時間が充分にないことが懸念され、日本政府は第五回内国勸業博覧会の美術館及び工業館に出品中の美術品の中に、セントルイス万博に出品するのに適したものがある否かを調査することにし、東京美術学校校長正木直彦、東京美術学校教授高村光雲、農商務技師山口務を派遣した。出願点数と比較して、実際に監査に持ちこんだ作品は以下の表1のように減少した。審査結果も厳しく半数以上が美術品として不合格であったが、不合格品は工芸品として出願することができた。監査合格品は、上野公園の日本美術協会列品館において12月26日、27日の2日間美術に関係する者や皇族、新聞記者などに観覧させた。

工業品においては、七寶は愛知県の出品はすべて許可されたが、銅器は不許可品が多数あった中で富山県の出品はすべて許可されるなど、地域の特産品については特別の配慮がされたようだ。織物の友禅及び傘地は第五回内国勸業博覧会で一等以上の賞を受けた者に限り許可した。電気は当初出品の予定がなかったが博覧会会社の要請により出品を急遽決定したこともあり、第五回内国勸業博覧会の出品者で電気に関する機械器具類の出品を勧誘した。教育に関する出品は、すべて文部省に託して品種及び出品人を指定し、初等教育から高等教育に至るまでの日本の教育の現状を系統的に展示した。

表 1. 美術品の出願と監査

品名	出願点数	監査品総数	合格品数	不合格品数
日本画	498	273	64	209
西洋画	105	56	28	28
彫塑	93	68	36	32
金工	132	64	22	40
漆器	103	61	16	45
木竹牙角介甲工類	29	17	5	12
陶磁器七寶	194	103	44	59
染織刺繍	60	42	20	22
製版	16	9	0	9
美術工芸図案	45	17	6	11
建築図案及模型	5	3	2	1
合計	1280	713	243	468

(『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』農商務省、第二編 124-125 頁より作成)

今までの万博では政府が民間の物品を買い上げて出品したり、出品物製作品を補助したりした。しかしセントルイス万博では、工業品は出願者の 8 割を削減したほど出願者も多く、出品物の製作に関しては、政府は少しも補助を与えず、事務局で陳列箱、陳列台及び陳列装飾は調整したが、出品者が自ら経営し、共同あるいは一人で陳列装飾をした人も少なくなかった。<sup>15)</sup> またセントルイス万博では、日本はロシアとの戦争を想定して、費用の節約を旨としたこともあり、第五回内国勸業博覧会の展示物や陳列台、陳列箱の再利用に努めた。

上記のように、セントルイス万博は我国の文化産業の発展、輸出拡大などの明確な意図を持った出展方針のもとで、初めて民間の企業、個人や団体が積極的に参加した万博であり、前年大阪で開かれた第五回内国勸業博覧会の影響が反映された万博であった。

### 3. 第五回内国勸業博覧会とセントルイス万博

日本が開国した 1854 年には、すでにロンドンで万国博覧会 (1851 年) が開催されていた。1872 年に文部省はウィーン万博への出品物を集める目的から、湯島聖堂で「博覧会」を開催した。内務卿大久保利通は殖産興業を目的とした博覧会を開くことを主唱し、第一回内国勸業博覧会が内務省 (のち農商務省) の主催で、1877 年西南戦争中に東京で開催された。第一回内国博覧会では、外国からの出品を許さず、外国産品の展示物は政府の購入品のみで制限し、機械・美術工芸品を展示、即売し国内産業の発展を図った。第四回の勸業博の開会前に日清戦争が起こり中止論も多く出たが政府は、「殖産興業政策は、たとえ戦時中でも中止すべきでない」としてこれを強行することとした。会期は 1895 (明治 28) 年 4 月 1 日から 7 月 31 日で、京都で開催された。<sup>16)</sup>

1894 (明治 27) 年の日清戦争の勝利や 1897 (明治 30) 年の条約改正を実施し「諸外国と

対等の交際をなし三十二年北清騒乱あるや直に兵を出し列強と共に其の裁定に努め」1902（明治 35）年には日英同盟を結んだ日本が開催する第五回内国勸業博覧会が、今までの勸業博覧会とは異なる規模となるのは当然であるとし<sup>17)</sup>、初めて海外からの出品を許可した。日本に新しい工場制工業を導入し、資本主義を定着させる目的をもって開かれた内国勸業博覧会は、今や資本主義を強化し、日本の工業化を成熟させ、それによって海外貿易を伸ばそうとする目的をもつことになった。第五回は、貿易の拡大を求める経済的意図の濃いものであった。

第五回内国勸業博覧会は当初 1899 年（明治 32 年）に開催予定であったが、日本政府は 1900 年（明治 33 年）パリ万博に参加を決めており、1901 年（明治 34 年）英国グラスゴー万博の参加準備もあるため、1903 年（明治 36 年）に延期された。会場面積約 32 ㎡に農業館、林業館、水産館、工業館、機械館、教育館、美術館、通運館、動物館、水産館、台湾館、海外の産品を展示する参考館を建設した。入場者数 435 万人、巨大な冷蔵庫や日本初となるウォーターシュート、米国人ダンサーの舞台が見られる不思議館、見事なイルミネーションが見られた博覧会であった。

参考館には、ドイツ、アメリカ、イギリス、清国、オーストラリア、フランス、カナダ（英領）、インド（蘭領）、韓国、ポルトガル、ブラジル、ロシア、ハワイ、インド（英領）、イタリア、オーストラリア（英領）、オランダ、トルコの 18 各国が出品し、初めて外国が出品したこともあり、多くの入場者を集めた。また外国の出品意欲も強く朝鮮、中国、アメリカ、カナダ、オレゴン州はそれぞれ代表事務官を派遣して参考館に陳列し、カナダ政府は独立館を建てた。日本が、「将来本邦ニ於テ万国博覧会ヲ開催スヘキ一段階トシテ頗ル有効」<sup>18)</sup>と自負したこの博覧会は、米国の新聞では「大阪博覧会」と称され、以下のように評価された。「パリ、シカゴ、バッファロー博を訪れた人々にとって、大阪博は小さく感じるだろう。しかし日本は産業や工業において比較的新しい国である。事業の拡大や博覧会の疑う余地のない成功は驚きであり、関係者が誇るのは当然である。」<sup>19)</sup>欧米にとって西洋化に邁進する日本は、新たに開かれた魅力的な市場であった。カナダは日本のパン需要を見込んで大量の小麦を展示し、米国のオレゴン州の視察者は、オレゴン州の展示は東洋への米国の貿易に良い機会となると報告している。

新領土紹介を目的とした台湾館に、参考品として清国福建省福州の製産品が展示され、これを発見した清国留学生が「日本が福建省を台湾の如く勢力圏におさめようと目論んだ狡計であると断じ、参考館に移すことを要求した」事件が起こった。<sup>20)</sup>最終的には清国公使の申し出により、福州出品は参考館内の四川省の部に移動させることで落ち着いた。このことは、日本の領土的野心の現われであり、国家領域の拡張の思惑と日本の国家領域を認識させる場として博覧会を利用する日本政府の姿勢は、セントルイス万博の通運館の展示に繋がっているといえる。日本は、通運館の日本の展示地域に大日本帝国名勝彩色写真額を展示し、朝鮮半島の写真もその中に含めていた。

第五回内国勸業博覧会では、工業地域の拡大や機械化進展による大量生産の開始により、工業部門の出品が目立って増加し、この部の出品数の増大は、19 世紀末農業国から工業国へ変貌する日本の姿を映しだしていた。しかし、博覧会審査報告は機械に関しては次のような評価を下していた。機械は長足の進歩をなしたが、欧米の列品と比較すれば差は大きく「輸入品の

圧迫を脱し機械工業独立に達せんには一層の堅志努力を要す」とし、海外輸出できる機械として「調帯、調繩、麻綱、綱索、電池、印刷機械、人力車」を挙げていた。<sup>21)</sup>

第五回内国勸業博覧会は、内国と称していたが実質的には日本初の国際博覧会であった。政府は、これ以後、内国博を開催することはなかった。米国の新聞は、米国の機械の展示品の中から何かを学ぼうとしている研究熱心な日本の技術者を賞賛し、「大阪博はそれ自身が小さな世界を示していて、日本がその成功を誇るのには当然である。日本は、セントルイス万博に精巧な展示を持ってくるつもりであり、疑いなく今までの国際博で作ったものの中で最高のものとなるであろう。」と述べた。

#### 4. セントルイス万博における日本の展示品

##### 1) 日本の展示区域と主な展示品

セントルイス万博の展示は、教育、美術、心芸、工業、機械、電気、運輸、農業、園芸、林業、採鉱及冶金、漁業及狩猟館、人類学、経済、体育、家畜の16の区部門 (Department) に分類された。16の区部門は、さらに144部門 (group)、807類 (class) に細分され、14の陳列館に展示された。日本の展示品については、以下の表にまとめた。

表2 セントルイス万博の日本の展示品

陳列館の名称	日本の展示面積	日本の主な展示品
教育館及経済館	5468	日本の教育システムを写真で紹介
美術館	7398	日本画、洋画、彫刻、七寶、銅器、漆器、刺繍、金銀器、友禅、陶磁器
心芸館	400	印刷機械 (星一が個人で出品)
工業館	2万6179	絹織物、製糸順序模型、生糸、織物、扇子、人形、竹細工、化学用諸器械
工芸館	4万9194	銅器、家具、陶磁器、七寶、象牙細工、屏風、刺繍、漆器、真珠、金銀器
機械館	不明	不明
電気館	1596	電信電話機、発電機、調網帯、調帯
通運館	1万6046	大日本帝国地理模型、刺繍世界航路図、名勝彩色写真
農業館	1万0872	茶、醤油、菓子、素麺、落花生、ビール、水飴、砂糖、缶詰、樟脳
林業漁業及狩猟館	6948	経木真田、木材、毛皮、漁船模型、布海苔、寒天
採掘及冶金館	8078	採炭所模型、精練所模型、銅坑模型、精選所模型、石炭、各種鉱物標本

面積の単位は平方フィート、(『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』農商務省、第二編、354-358頁より作成)

日本は上記の陳列館における展示スペースとともに日本政府館の敷地も与えられ、広さ15万平方フィートの敷地内に、本館、事務所、売店、喫茶店、眺望亭、台湾館など8つの建築物と日本庭園が作られた。眺望亭は、第五回内国勸業博覧会に御料局が出品した建物を博覧会事務局が買い受けて建設したもので、二百年前の徳川将軍の屋敷をモデルとしていた。愛知新聞が、「日本の陳列品は遍く一切の日本品を網羅したる点に在り是殊に都合能く日本の如何なる国なるかを示すに足れり日本の出品物は博覧会何れの部門にも陳列せられざるはなくして而

して又其何れに於いても共に有用を以て著はれざるはなし」<sup>22)</sup>と述べたように、セントルイス万博の参加国の中で日本の陳列面積は、ドイツ、フランス、イギリスに次ぐ第4位であった。<sup>23)</sup>

日露戦争中にもかかわらず多くの日本人が、セントルイス万博を視察するため渡米し、米国の文化や今後の貿易について以下のような報告をしている。

## 2) 渡米した日本人の報告

聖路易万国博覧会愛知出品同盟会は、出品人にセントルイス万博における商品の売れ行きを次のように説明した。<sup>24)</sup>絞染類については、価格の高さと使用に便利でない物は、今後も売れる見込みがなく、新たな使用方法を提案したり、色合いを「パツ」としたり工夫する必要がある。絞類の「鬼鹿の子」と称する物は、婦人服として使用される見込みがある。しかし「今回の博覧会にも大いに人目を引き居り、油断すれば鋭き外国人に模倣される恐れもある。」と、注意を喚起していた。

名古屋市嘱託観察員の桑野締太郎は、「聖路易博覧会報告」<sup>25)</sup>として詳細に各陳列館の状況と今後の貿易について次のように報告している。工業館については、「工業の進歩を主眼とするこの館を見れば、経済的貧富がよくわかる。この館最大の面積を占めるのはフランスで、婦人衣服の艶麗優美なる世界一を称するパリの出品の豪華な毛皮や、陳列の巧拙で観覧者の目を引く。面積では第二位の日本は、展示地域の正面に鳥居を設け絹織物生糸、段通、提灯、傘など装飾面では工芸館陳列品ほどの粹美さはないが、我国重要な貿易品を展示している。また、シンガー会社のミシンなど大いに学ぶべきものがある。」また工芸館の展示品について、「一番売れたのが銅器で、象牙彫、陶器がこれに次刺繍、漆器、屏風、金銀器等が売れているが、単に安価の品のみが売れ、多数出品している七寶は不況のせいで売れていない。」その原因として、七宝が工場品のように扱われ陳列されていることを指摘し、「七宝は米国人にあまり知られていないが、実際見ればその美麗精巧に驚嘆しない者はいないので、将来広告宣伝すれば売れるであろう」と述べている。

さらに、名古屋市の商品があまり売れていない状況を日本の他県と比較して考察し、「銅器は大阪の廉価に負けて売れ行きが悪い。漆器は優れている静岡県品の品が多少売れているが、名古屋市の品は売れていない。刺繍は華麗優美の点では京都に劣り、廉価の品物は横浜貿易商の出品は色彩配合意匠で優れており、提灯は大阪製造品が安価で派手であるため、名古屋市の製品は売れない。」と、しかし行灯は一ヶ月で売り切れ現在再注文をしている。

冶金館における日本の展示に対して、東京朝日新聞の記者は次のような感想を述べている。<sup>26)</sup> 冶金館では、三井物産鉱山部、三菱会社、古河銅山、藤田組が出品している。日本の展示地域には、金、銀、銅、鉄、鉛、錫、水銀、石炭、石油等鉱山冶金部に於いて重要な物品で陳列していないものはない。特に特筆すべきは、この館内の日本展示地域で製鉄所から出品されたレールその他の鉄器を見て驚嘆する白人が多く、多くの白人曰く「日本にこのように石炭あるのさへ予想外なのに、斯くのごとき鉄器を製作するに至りては真に恐るべきの国なりと内地においては攻撃の目標となり、失敗又失敗を重ねたる製鉄所が海外にありて白人を驚かしつつあるこそ世は様々と云うべきか」産業の基盤となる製鉄業に対して、海外からの驚嘆されていることが分かり、近代化の基盤が除々に整いつつあった。

金子堅太郎（貴族院議員）はセントルイス博覧会における日本の出品について<sup>27)</sup>、「ヒラディルヒア仏蘭西（明治 22 年開設）及びシカゴに於けるものに比較して大いに優る所あるも劣る点はなく」と日本の工業力の向上を指摘した。さらに「日米貿易の発達を助け未だ通商盛んならざりし地方に向かって互易の道を開く」とセントルイス万博による日本の貿易上の利益を評価した。今後の貿易の留意点として、「日本の製品でセントルイス地方において最も利用され易いものは、竹材及び畳表である。竹材や畳表を利用して、米国向きの家具、ソファーや椅子を製作すること、欧米人の嗜好を取り入れた美術品を製作すべきであること」、米国人の嗜好を研究するにあたり、「独逸仏蘭西の出品中に我国の筑前の高取焼及び出雲焼を模造したものがあるので今後の参考とすること」を挙げていた。また、日本女性が茶の接待をした金閣寺がある日本庭園では、「戦勝国の婦人を見ようとして多数の来客があった」と、セントルイス万博の日本展示の活況を日露戦争と結び付けていた。セントルイス万博については、「今回の博覧会は我帝国殖産興業を国外に発揚するに少なからざる貢献あった。」と総括している。

## 5. 日本の展示品に対する評価

### 1) 審査と褒章授与

出品物の審査は万国審査委員会が行い、規定では博覧会開会から 30 日後、6 月 1 日より行うことになっていたが、各国の出品が遅れたため、審査開始が 9 月 1 日に延期された。日本は陳列が早く終了していたので、審査開始の延期により、出品物の品質が劣化する恐れもあり、博覧会社と交渉して農産物は 6 月中の特別審査を受けた。政府館敷地の日本庭園内の菊花は、11 月 3 日の天長節（明治天皇の誕生日）に満開になるように栽培されていたため、11 月初旬に審査を受けた。また受賞を増やすには、外国審査委員との交流が必要と判断し、9 月 11 日には日本の審査委員と外国の審査委員、博覧会当局者を招いて政府館敷地内日本庭園で宴会を催した。このような事務局の努力や日露戦争の影響もあり、1900 年のパリ万博と比較して以下のように多くの褒章を得ることに成功した。

表 3. セントルイス万博とパリ万博の審査の比較

日本出品物に関する褒章	1904 年セントルイス万博	1900 年パリ万博	増減
大褒章	161	40	増 121
金牌	420	138	増 282
銀牌	644	256	増 388
銅牌	614	507	増 107
合計	1839	1257	増 998

（『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』農商務省、第二編、402 頁より作成。）

また、セントルイス万博参加国の中で、受賞者数は第 4 位であったが、圧倒的に多い開催国米国を除けば、2 位、3 位とそれほどの差はなかった。



表 4. 海外参加国中主要なる出品人受賞人数

国名	大褒章	金牌	銀牌	銅牌	合計
米国	1000	2500	2750	3000	9250
フランス	698	800	493	264	2225
ドイツ	440	620	450	240	1750
日本	186	356	601	589	1702
ブラジル	62	379	576	505	1522
アルゼンチン	29	249	335	297	910
イギリス	134	244	168	133	679
オーストラリア	78	247	198	153	676

(永山定富『海外博覧会本邦参同史料(第5遍)』フジミ書房、49-50頁より作成。)

褒賞は16の区、144の分類ごとに出品した人に贈られ、日本の出品は以下の区で受賞している。

表 5. 日本出品人の受賞人数 ( )内の数字は協賛人が受賞した人数。

区	大褒賞	金牌	銀牌	銅牌	合計
教育	12 ( 1 )	10 ( 9 )	4 ( 1 )	2	28 ( 11 )
美術	6 ( 1 )	29 ( 4 )	41	22	98 ( 5 )
心芸	9	21	25	28	83
工業	78	205 ( 34 )	452 ( 33 )	474 ( 29 )	1209 ( 96 )
機械		1	1	1	3
電気		4	1 ( 1 )	1	6 ( 1 )
通運	2	( 1 )	1 ( 1 )	1	4 ( 2 )
農業	24	48 ( 2 )	29	20	121 ( 2 )
園芸	1	3	8 ( 1 )	3	15 ( 1 )
山林	5	14 ( 1 )	16	16	51 ( 1 )
鉱山	9	6 ( 5 )	9	5 ( 1 )	29 ( 6 )
水産及狩猟	6	15	18	11	50
人類学		1			1
経済	4 ( 3 )	1 ( 5 )			5
体育		1	2		3
合計	156 ( 5 )	355 ( 61 )	607 ( 37 )	584 ( 30 )	1706 ( 133 )

(『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』農商務省、第二編、402-403頁より作成。)

上記のように審査の結果は、工業の受賞が圧倒的に多く、次に農業が続ぎ、機械や電気の受賞が少なかった。工業部門の受賞品は、絹糸及絹織物で239人、窯業で181人、刷子、精良革製品、小間物及藍細工で179人、服装に関係ある各種工業で94人、銀工及金工製品で83人

であり、農業では砂糖及び糖菓—調味料の部門で 37 人が受賞した。<sup>28)</sup>日本としては、機械製品での受賞を望んだが、受賞品の多くが従来日本の得意とする分野であり、近代産業ではなかった。日本の受賞について、朝日新聞の記者は次のような感想を掲載した。「今回の名誉賞を得たる物品を見るに欧米の模造品、機械の如き電気の如きその他各種の物品に多く注意を与えず、日本特有の物品には予期しない名誉賞を与えている。例えば工業部における麦藁細工の茶入れに名誉賞を与えたように、すべて欧米人の目には我国と異なる着眼がある」<sup>29)</sup>そして、欧米人の嗜好にかなう貿易品を製作する必要性を強調した。

## 2) 米国での評判

日本の庭園は万博内三大庭園の第一に推薦された。三大庭園とは日英仏の庭園で、英国は華麗、仏国は精練、日本の庭園は風雅と称された。日本政府は、「英国は前年夏秋より準備し予算は三万ドル、仏国は予算三万八千ドル、日本はその三分の一の予算で短期間に仕上げが、往々外国人の園遊会に借りられるなど」、他国の庭園と比較しても優れていたと自負していた。<sup>30)</sup>日本庭園は「高台に造園された独特なたぐいまれな特徴を持っている日本の風景は、博覧会で最も趣があり絵のように美しい場所の一つになるであろう」<sup>31)</sup>と称賛された。

工芸館の展示については、以下のような詳細に説明されていた。「工芸館で、日本は大変興味深い展示を見せた。大変美しい刺繍、ブロンズ、磁器製品、象牙の彫り物、七寶細工、漆器があるが、特に目を引いたのは日本陳列区域の入口である、実物大で再現された日光寺の門である。」<sup>32)</sup>電気館の日本の展示は、ドイツ、フランス、イギリスと比較して次のように述べられた。「ドイツは、電気器具だけでなく物理化学を含み、ドイツが独自の技術で他の国をリードしていくことを示していた。例えば、壊れないイエナガラス、気温の変化に強い望遠鏡、マイクロスコープ、カメラなどが展示されていた。イギリスは、ケンブリッジ大学所蔵の多くのすぐれた器械を展示し、フランスは独創的なグラマン製の器械を見せ、機械における電気への転換の新時代の幕開けを示した。これらの展示の流れが、日本の展示によって切断された。日本の電気技術者は、発電機、動力、電話の組み立て方法や設計方法を欧米から徹底的に学んでいた。日本製品には、その装飾に独特の日本の特徴が現われ、日本のスクリーンと扇子を思い出させる。」<sup>33)</sup>

一方、工業館における日本の展示の感想として、近代産業へ日本が向かっていることを指摘していた。「日本の主な産業は生糸と絹製品であり、扇子、提灯、傘、花火も重要な産業である。しかし、東京で作られた精巧な鋼鉄の機械の展示は、日本の前進を示している。また、日本製のカメラの一群の展示は、日本人が別の工業の出願に成功したことを示している」<sup>34)</sup>日本の農業については、茶、タバコや進歩的な実験農場の展示が説明され、「醤油、日本のウスターソースは、ピラミッドのように多量の樽がディスプレイされていた。さらに、持ち帰りができるように醤油が現代的なブリキ製の容器に入れられて用意されていた。実際、醤油の展示区域はアメリカのデリカテッセンのようだった」と評された。

日本の出品物全体の評価として、「戦争の技術と平和の追求の両面において、日本は世界の中で地位を得ようとしている。これがセントルイス博での日本の展示の真意である」<sup>35)</sup>

## 6. セントルイス万博と貿易の変化

セントルイス万博以後の輸出額の変化について以下の表6、7にまとめた。

表6. 日本の輸出重要品と金額 (単位 円)

項目	1904年	1905年	1906年	1906年の1904年 比伸率%
輸出貿易総額	319,000,000	321,000,000	423,000,000	32.6%
貿易品細目				
生糸	88,741,000	71,999,000	110,499,000	245%
綿織物	7,743,000	11,492,000	15,619,000	101.7%
陶磁器	3,873,000	5,324,000	7,943,000	105.1%
硝子及同製品	1,051,000	1,753,000	2,673,000	154.3%
機械及同部分品	909,000	989,000	1,649,000	81.4%
水産物	6,852,000	7,122,000	8,295,000	21.1%
木材及板	3,249,000	5,197,000	9,329,000	187.1%
精糖	243,000	3,861,000	10,984,000	4420%
掛時計及置時計	468,984	575,740	843,575	79.7%

(『大日本外国貿易年表 明治39年』原書房、1991年。『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社、1927年。より作成。)

表7. 日本の米国に対する輸出品目と金額 (単位 円)

貿易品	1904年	1905年	1906年	1906年の1904年 比伸率%
陶磁器	1,932,000	2,826,000	4,333,000	124.2%
生糸	60,748,000	53,826,000	78,392,000	29.0%
醤油	119,797	147,507	241,345	101.5%
竹藤	59,041	94,324	162,175	174.7%
家具	91,740	187,423	178,975	95.1%

(『大日本外国貿易年表 明治39年』原書房、1991年。『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社、1927年。より作成。)

セントルイス万博を契機に日本の貿易輸出額は、表6に見られるように着実な伸びを示している。特に日露戦争の終結した1906年は、1904年と比べ、32.6%の大幅な増加となっている。品目別に考察すると、綿織物、陶磁器、硝子製品、木材などにおいて輸出額は倍増しており、劇的ともいえる実績を示している。対米向けに限っても、表7に見られるように陶磁器、醤油などが大きな伸びを示した。セントルイス万博の影響がすぐに現われたともいえる。少なくとも、日本政府のセントルイス万博参加の目的の一つであった貿易の振興に対して、セントルイス万博は一定の効果があった。

## 7. おわりに

上記のように、セントルイス万博後日本の輸出は顕著な伸びを示した。特に米国人に醤油の味を知らせるために、工夫を凝らした展示を行った醤油は、1906年度の輸出額は1904年の2倍となった。このことから、万国博覧会は商品の販売に大きな影響を与えたことが理解できる。金子堅太郎は、1895年にすでに博覧会の日本の対する影響として、以下のように指摘していた。「本邦の如きは19世紀の末年に於いて世界文明国の仲間入りをなしたるため、欧州に於ける先進国が数百年間に経験したる事件は、其経過の時期を須たず容易に之を一時に採用する好遇を得たり、其れ会々後進国が先進国に優る特長ある所にして後進国の幸福なり」<sup>36)</sup>

日本は、1867年に初めて万博に参加して以来、外国の技術や文化を学習すると共に日本の貿易拡大を意図して積極的に万博に参加してきた。セントルイス万博では、日本の展示が他国の展示と比較して、展示方法が稚拙であり、商品の価格が高いことや実用性がないこと、また欧米人と日本人の嗜好の違いを認識し商品を開発する必要性を痛感していた。一方米国は、電気館や工業館の日本の展示に近代産業の萌芽を認めていた。万国博覧会は、貿易拡大の場であるとともにその国がどのような国なのか示す場でもあった。

注：

- 1) 吉田光邦『改訂版万国博覧会—技術文明的に』NHKブックス、1985年、24頁。
- 2) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社1992年。渡辺かよ子「1904年セントルイス万国博覧会における『教育』」『愛知淑徳大学論集』（コミュニケーション学部篇）第3号2003年。畑恵子「セントルイス万国博覧会における『日本』の建築物」『日本建築学会計画論文集』第532号2003年。小澤英二「万国博覧会とオリンピック—1904年セントルイス大会での『人類学の日』をめぐって—」『椙山女学園大会研究論集』第25号、1994年。他。
- 3) 志邨匠子「日本画の装飾性をめぐるいくつかの立場—セントルイス万博における日本画論を中心に—」『女子美術大学紀要』1993年、13-33頁。
- 4) 宮武公夫「博覧会の記憶—1904年セントルイス博覧会とアイヌ—」『北大文学研究科紀要118』2006年。
- 5) 長野覚「1904年（明治37年）セントルイス万国博覧会出品の“大日本帝国交通地理模型”（10万分ノ1）」
- 6) 平野繁臣『国際博覧会歴史事典』内山工房、1999年、52頁。
- 7) 『万国博覧会のすべて』日本経済新聞社、1966年、44頁。
- 8) *World's Fair Bulletin*, May, 1902. vol .3, No .7, p.19.
- 9) *Ibid.*, vol .3, No .7, p.20.
- 10) 川口仁志「セントルイス万国博覧会における日本の教育」日本比較教育学会第37回大会2001年6月23日発表用資料、1-2頁。
- 11) 『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編、農商務省、78-80頁。
- 12) *World's Fair Bulletin*, vol.5, No.2, December 1903, pp.20-21.
- 13) 『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編、87-89頁。
- 14) 前掲「日本画の装飾性をめぐるいくつかの立場」20頁。
- 15) 『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編、農商務省、405-410頁。
- 16) 前掲『改訂版万国博覧会—技術文明的に—』120頁。
- 17) 『明治前期産業発達史資料』勸業博覧会資料6、1973年、1-5頁。
- 18) 『第五回内国勸業博覧会事務報告』上巻、495頁。
- 19) Scrapbook, vol. 14, p.105. St.Luis Public Library.
- 20) 国雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策』岩田書院、2005年、178-179頁。
- 21) 『明治前期産業発達史資料』勸業博覧会資料55、1973年、1-3頁。
- 22) 「日本の平和的進歩」『新愛知新聞』1904年9月13日。
- 23) 復刻永山定富『海外博覧会本邦参同史料（第5編）』フジミ書房、1997年、45頁。
- 24) 「聖博愛知出品会報告」『新愛知新聞』1904年9月16、17日。
- 25) 「聖路易博覧会報告（一）～（四）」『新愛知新聞』1904年9月28、29、30、31日。
- 26) 青尊生「聖路易博覧会」『東京朝日新聞』1904年7月21日。

- 
- 27) 「聖路易博覧会評」『毎日新聞』1904年9月4、5日。在米金子堅太郎男爵より農商務省に達したる手簡中にあつた博覧会概評。
- 28) 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第一編 96-128頁、第二編 405-410頁。
- 29) 青尊生「聖路易博覧会」『東京朝日新聞』1904年11月16日。
- 30) 前掲『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告』第二編、468頁。
- 31) Scrapbook, vol. 12, p. 115. St. Louis Public Library.
- 32) *World's Fair Bulletin*, vol. 5, No. 10, August 1904, p. 8.
- 33) *The World's Work*, p. 5094.
- 34) *The World's Work*, p. 5148.
- 35) *The World's Work*, p. 5152.
- 36) 金子堅太郎「博覧会の沿革及其効能」『経済政策』大倉書店、1902年、515頁。